

## 英語の絵本に見られる英語の見方・考え方の一考察

村端 佳子 黒木 美佐\*

### 要約

平成29年に告示された学習指導要領において、外国語活動・外国語の目標の中に「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ」外国語による言語活動を通してコミュニケーションを図る資質・能力を育成することを目指す、という文言が盛り込まれている(文部科学省、2017)。そこで本稿ではそのような言語独特の見方や考え方を英語と日本語の絵本の中に探り、英語に特有な「見方・考え方」を児童に感じさせる可能性を探った。

一般的に英語は説明的で客観的な文章を好み、日本語は論理的な表現は好まず、オノマトペの多様に見られるような感覚的で曖昧な文を好むという違いが見られる。本稿ではそのような違いが日英の絵本にも現れるのかを探るために、英語が原本で日本語に訳されている2冊の絵本『はらぺこあおむし』と『あたまからつまさきまで』の英語と日本語を比較分析した。これらの2冊はいずれもエリック・カールによるもので、日本語でもよく読まれている人気の絵本である。比較してみると、日本語の絵本では、語り口調や劇的要素を用いるという特徴や、変化する人称代名詞に加えてオノマトペの多用から、感覚的で直接的な表現が多く見られるということがわかった。一方、英語の絵本では説明的で分析的および客観的表現が特徴として見られた。このような表現方法の違いや特徴は日本の文学作品にも見られ、日本語と英語の一般的な表現方法の違いと見ても良い。そこで、子供達が慣れ親しんでいて理解が容易であると思われるような英語絵本の読み聞かせをすることは、言語によって物事の描き方には違いがあることや、違いだけでなく日本語と英語の共通点への気づきを促すことへとつながる。このように英語の絵本に触れさせる利点の一つとして、英語の見方や考え方を明確に理解するとまではいかないが、英語独特の表現方法にふれることができる可能性を論じた。

**キーワード**：小学校英語、絵本、外国語の見方・考え方

### 1. はじめに

平成29年に告示された学習指導要領において、外国語活動・外国語の目標の中に「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ」外国語による言語活動を通してコミュニケーションを図る資質・能力を育成することを目指す、という文言が盛り込まれている(文部科学省、2018)。「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」とは、外国語によるコミュニケーションを行う際に、日本語で行うのとは異なる視点で物事を捉え、日本語とは異なる考え方で思考していくような、「物事を捉える視点や考え方」として解説されている(同上、p.11)。本稿の目的は、日本語の絵本と英語の絵本を比較することで、英語独特の表現方法を見つけ出し、そのような「視点や考え方」を英語の絵本の中に探り、絵本の読み聞かせによってそのような「見方・考え方」を児童に感じさせることができるのではないか、その可能性を探ることである。

## 2. 小学校英語の授業で絵本を使用する意義

### (1) 小学校英語での絵本の扱い

小学校英語の授業では、児童の興味関心を持続させるためにさまざまな活動を取り入れて授業を構成するのだが、そのような活動の一つに、しばしば絵本の読み聞かせが挙げられている(樋口他、2017)。絵本は当然児童の発達段階と英語の知識や技能に応じたものを選択する必要があるが、ただ教師が読み聞かせを行うだけではなく、児童とやり取りをしながら、まとまった英語を聞いて全体から内容を推測させ、意味を捉える活動や、慣れ親しんだ語句を絵本の中で識別するという読む活動も可能である。さらに、高学年の児童が低学年の児童に読み聞かせをしたり、オリジナル絵本の創作や英語劇へ発展させることなど、一つのプロジェクトとして扱うことも考えられる(文部科学省、2018)。したがって小学校の外国語指導者に必要な資質や能力の一つに、感情を込めて絵本の読み聞かせができる、という項目が含まれている(樋口、2017)。

一方、絵本が子供の成長に与える影響とという側面からみると、正置・大阪保育研究所(2015)は絵本というものは言葉と絵と物語から成り立つ総合芸術であり、絵本によって子どもたちは「思考力」「イメージ力」「物語力」を育んでいく、と述べている。さらに、子どもは大人になっていく過程の中でパーソナリティの形成を図っていくが、こうしたパーソナリティの形成は人と人との関係性の中でしか育たないもので、テレビ、ゲーム機、携帯などの電子機器では育むことができない。子どもは主に親や保育者といった周囲の大人とのコミュニケーションを見真似てことばを習得しているが、その際に保育者とのやり取りの中で使用される「絵本」も一つの重要な言語材料となるのである、と述べている。つまり絵本との関わりはコミュニケーションの一種であり、子供自身の言語習得にも大きな役割を果たしている、と言えよう。

『幼稚園教育指導要領』(文部科学省、2019)にも絵本の読み聞かせが生きる力を養う上で重要であることが示されている。幼稚園教育では「生きる力」を育てる項目として、心身の健康に関する領域「健康」、人のかかわりに関する領域「人間関係」、身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」、そして言葉の獲得に関する領域「言葉」、及び感性と表現に関する領域「表現」の五つが掲げられている。そのなかで「言葉」の領域に関しては、「日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる」ことをねらいとし、その保育内容は「絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像する楽しさを味わう」ようにすることが示され、内容の取り扱いとしては「絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること」と明記されている。絵本の読み聞かせや読書が言語習得や想像力、表現力など、生きる力を養う上でかなり重要なものとして考えられているかが伺える。

以上のように幼児の言葉の発達には非常に重要で有効であると考えられる絵本ではあるが、日本の小学校で英語を外国語として学ぶ場合、絵本はどのような役割を果たすのだろうか。通常絵本は2、3歳から6歳くらいまでの幼児期に与えられるもので、保育園や幼稚園で使用される。しかし英語圏の幼児向けに書かれた英語の絵本を優れているからといってそのまま、外国語として学ぶ日本の小学生に読み聞かせをして、児童が理解し、絵本を楽しむことができるとは思われない。どのような英語の絵本の読み聞かせが可能であるかを考えた時、日本で人気の絵本には日本で最初から出版されているものに加え、元々外国で親しまれていた本を外国語から日本語に翻訳して日本で出版されているものも多数あることに注目した。たとえば、アメリカ人の絵本作家エリック・カールの『はらぺこあおむし』は、1969年に発表されてから60か国以上の国の言語に翻訳され世界中で親しまれている。またこの他にも、『保育の中の絵本』(正置・大阪保育研究所編、2015)には子供たちに紹介したい絵本として、A・トルストイ作『おおきなかぶ』、ディック・ブルーナ作『しろ、あか、きいろ』

『うさこちゃんのゆういん』『うさこちゃんとどうぶつえん』、マーシャ・ブラウン作『三びきのやぎのがらがらどん』、ジーン・ジオン作『どろんこハリー』、モーリス・センダック作『かいじゅうたちのいるところ』など外国で出版され日本語に翻訳された絵本が多数挙げられている。

ここで当然次のような疑問が生じる。すなわち、外国語で書かれた絵本が日本語に翻訳された場合、細心の配慮を払って翻訳されたとしても、原本とは異なる絵本となるのではないか、という疑問である。また異なるとすればどのように異なるのであろうか。さらに、日本で出版された絵本が日本語から外国語に翻訳されて海外で親しまれている場合もあるが、その場合にも同様の疑問が生じる。古市・西崎（2009）は、65組の日英の絵本を比較し、原本との違いを引き起こす要因を16に分類している。もっとも多いのが「絵本名の変更・副題の挿入」である。次に「生活習慣による違い」、「オノマトペの使用が多い日本語」、「人名・地名の変更」といった要因が多く、「状況説明の加筆」が次に続く。また、言葉のリズム、製本の方法、時代の差、文字の違いなども翻訳に影響を及ぼしているという。これらの要因を見ていくと、ある言語で書かれた絵本を他の言語に翻訳するということは、絵本という絵を中心にしてページが進んでいき文字が少ないであろうと思われる本であっても、決してある言葉を別の言語の言葉に置き換えるという単純な作業ではなく、さまざまな言語的・社会的・文化的な配慮・工夫がなされているということがわかる。であるとすれば、英語でコミュニケーションを行う際に日本語で行うのとは異なる物事の捉え方や考え方を示すために、英語の絵本を使用する可能性を探る意義があるのではないだろうか。すなわち「英語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」をいくらかでも感じさせ、体験させることができるのではないだろうか。

## （2）日英の表現方法の違いについて

英語と日本語のコミュニケーションのあり方の違いに関して、荒木（1994）は英語はダイアログ言語で日本語はモノログ言語であると述べ、日本語における主語の欠落に大きな違いがあると説明している。たとえば川端康成の『雪国』は「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」という書き出しで始まる。誰が、あるいは何が「トンネルを抜けた」のかは書いてない。これをサイデンステッカーは次のように英訳した。

The train came out of the long tunnel into the snow country.

すなわち、英文ではトンネルを抜けたのは列車であって、その列車が雪国に入ることが客観的に表されている。一方日本語の原文では、トンネルを抜けた主体が明らかにされていない。トンネルを抜けたのは乗り物のものであるが、トンネルを抜け出たところが雪国であるのを目にしたのはおそらく人であろうから、乗り物と人物が一体化した何かがトンネルを抜け出たように描かれている。日本語と英語では、このように対象世界の切り取り方が異なるのである。荒木（1994）はさらに川端康成の『伊豆踊り子』でも、日本語に主語がないことを以下のように指摘している。主人公が茶店で休んだ後に、50 銭を置いて出ると、茶店のお婆さんがびっくりして主人公を追いかけてくる場面である。最初が原文、次が同じくサイデンステッカーの英訳である。

「こんなに載いては勿体のうございます。申し訳ございません。」

そして私のカバンを抱きかかえて渡そうとせずに、幾ら断ってもその辺まで送ると言って承知しなかった。

一町ばかりもちよこちよこついて来て、同じことを繰り返していた。

“This is too much. I really can't take it.”

She clutched at my book sack and held me back, trying to return the money I had given her, and when I refused it, she hobbled along after me. She must at least see me off up the road, she insisted. (下線部は筆者)

まず「こんなに戴いては勿体のうございます」のところは **This is too much.** (これは多すぎます)と **This** を主語にした文で簡潔にあらわし、「申し訳ございません」は **I really can't take it.** (私はそれを受け取ることができません)と **I** と **it** を用いて状況を明確に描写している。その後続く箇所では、誰がカバンを抱きかかえて何を渡そうとしないのか、誰が断るのか、誰が誰を送ると誰が言っているのか、誰がついて来るのか、誰が繰り返しているのか、日本語の原文には一切書かれていない。ところがそのままでは英文にすることができないので、英文に翻訳された時には、下線で示したように誰が何を、あるいは誰が誰を、どうするのかが表示されている(同上、pp. 101-2)。さらに、なぜついて来るのか、**trying to return the money I had given her** (私が彼女に渡したお金を返そうとして)と原文には書かれていない理由が付け加えられ、**I refused it** (私はそれ(=お金を返すこと)を断った)という状況さえ加筆されているのである。このように日本語と英語を比較してみると、英語は非常に説明的で客観的な文章になっているが、日本語文は説明に欠ける。しかし決して日本語が曖昧でそれが良くないということではない。むしろ『雪国』の冒頭部分は名文とされ、主語や目的語がなくても日本語の文章では一向に差し支えない。

さらに荒木(1994)では、「よたよた歩く」「よちよち歩く」「ひよこひよこ歩く」などのオノマトペ(擬態語・擬声語)を多用する日本語は、対象世界を論理的に分析しようとするのではなく、直接的かつ感覚的に把握する言語であるとして、英語との違いが挙げられている。「さらさらした雪」「すべすべした肌」「(彼は)顔はノタツとしている」など英語に訳しにくい日本語のオノマトペはそれぞれ **dry and powdery snow** (乾いた粉のような雪)、**silky skin** (絹のような肌)、**he looks carefree and insensitive** (彼はのんきで無神経のように見える)と説明的に訳訳がなされてる。

このようにしてみると、英語は説明的で分析的かつ論理的な表現を好み、日本語は論理的な表現は好まず感覚的で曖昧な文を好むという違いが見られる。ではこのような特徴が、子供の絵本にも見られるのであろうか。本稿ではエリック・カール作の *The Very Hungry Caterpillar* とその日本語訳である『はらぺこあおむし』、およびおなじくエリック・カール作の *From Head to Toe* とその日本語訳である『できるかな? あたまからつまさきまで』の2冊を比較し、果たして絵本の文にもそれぞれの言語の特徴が見られるのかどうか、見られるとするならば、それが「英語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を感じさせる手立てのひとつとして有効なのかどうかを探っていく。

### 3. 英語の絵本とその日本語訳の比較

#### (1) *The Very Hungry Caterpillar* と『はらぺこあおむし』の比較

まず英語で書かれた原本の *The Very Hungry Caterpillar* と、その日本語版の『はらぺこあおむし』を比較する。表1がその全文である。左側のそれぞれの原文に番号をつけ、それに対応する日本語が同じ番号の右側の日本語である。

表1 THE VERY HUNGRY CATERPILLARと『はらぺこあおむし』の全文

<i>The Very Hungry Caterpillar</i>	『はらぺこあおむし』
1. In the light of the moon a little egg lay on a leaf.	1. 「おや、はっぱの うえに ちっちゃな たまご。」 おつきさまが、そらからみて いいました。
2. One Sunday morning the warm sun came up and-pop!-out of the egg came a tiny and very hungry caterpillar.	2. おひさまが のぼって あたたかい にちようびの あさです。ぽん！ と たまごから ちっぽけな あ おむしが うまれました。あおむしは おなかの ぺ っこぺこ。
3. He started to look for some food.	3. あおむしは、たべるものを さがしはじめました。
4. On Monday he ate through one apple. But he was still hungry.	4. そして、げつようび、りんごを ひとつ みつけてた べました。まだ、おなかの ぺっこぺこ。
5. On Tuesday he ate through two pears, but, he was still hungry.	5. かようび、なしを ふたつ たべました。やっぱり おなかの ぺっこぺこ。
6. On Wednesday he ate through three plums, but he was still hungry.	6. すいようび、すももを みつつ たべました。それで も おなかの ぺっこぺこ。
7. On Thursday he ate through four strawberries, but he was still hungry.	7. もくようび、いちごを よつつ たべました。まだま だ おなかの ぺっこぺこ。
8. On Friday he ate through five oranges, but he was still hungry.	8. きんようび、オレンジを いくつか たべました。
9. On Saturday he ate through one piece of chocolate cake, one ice-cream cone, one pickle, one slice of Swiss cheese, slice of salami, one lollipop, one piece of cherry pie, one sausage, one cupcake, and one slice of watermelon. That night he had a stomachache!	9. どようび、あおむしの たべたものは なんでしょ う。チョコレートケーキと アイスクリームと ピク ルスと チーズと サラミと ペロペロキャンディ ーと さくらんぼパイと ソーセージと カップケ ーキと それから すいかですって！そのばん あ おむしは、おなかの いたくて なきました。
10. The next day was Sunday again. The caterpillar ate through one nice green leaf, and after that he felt much better.	10. つぎのひは また にちようび。あおむしは みどり の はっぱを たべました。とても おいしい はっ ぱでした。おなかの ぐあいも すっかり よくなり ました。
11. Now he was not hungry any more-and he was not a little caterpillar any more. He was a big, fat caterpillar.	11. もう あおむしは、はらぺこじゃ なくなりました。 ちっぽけだった あおむしは、ほら、こんなに おお きくて、ふとっちょに なったのです。
12. He built a small house, called a cocoon, around himself. He stayed inside for more than two weeks. Then he nibbled a hole in the cocoon, pushed his way out and...	12. まもなく あおむしは、さなぎに なって なんにち も ねむりました。それから さなぎのかわを むい で でてくるのです。
13. He was a beautiful butterfly!	13. 「あっ ちょうちょ！」あおむしが きれいなちょうに な りました。

この絵本はお腹をすかせた青虫が、いろいろなものを食べて大きくなっていき、最後には蝶々になるという話なので、基本的には英語も日本語もその話の筋はかわっていない。ところが古相（2006）も指摘するように、表現方法には多くの違いが見られる。まず最初の文を比較すると、英文では1. *In the light of the moon a little egg lay on a leaf.* と客観的な描写になっているのが、日本語では「おや、はっばのうえにちっちゃなたまご。」という台詞ではじまり、月を擬人化して読者に語りかけるように書かれている。このような手法は最後の箇所にもみられ、13. *He was a beautiful butterfly!* という最後の文が「あっ、ちようちよ！」という台詞のあとに「あおむしがきれいなちようちよになりました」となっている。特に、この「あっ」という感嘆詞が、聞き手の立場になって、語りかける人と聞く人が一緒に驚きや嬉しさを共有して、感動を高めるという役割を果たしている。感嘆詞は文11にも見られる。英文では...*he was not a little caterpillar any more. He was a big, fat caterpillar.* という部分に「ちっぽけだったあおむしは、ほら、こんなにおおきくて、ふとちよになったのです」と「ほら」という感嘆詞と、さらに「こんなに」という指示詞が使われていることで、聞き手の立場にたった語り口調になっている。このような「語り口調」と「劇的要素」は古相（2006）によって日本の絵本にみられる特徴として挙げられている。日本語の9. 「・・・なきました」は原文にはないのに付け加えられているのも、聞き手との共感を高めるためであろうか。

また英語の特徴というのは、以下の12の部分にも表れている。

12. *He built a small house, called a cocoon, around himself. He stayed inside for more than two weeks. Then he nibbled a hole in the cocoon, pushed his way out and...*

12. まもなく あおむしは、さなぎに なって なんにちも ねむりました。それから さなぎの かわを めいで でてくるのです。

英語では青虫は *built a small house called a cocoon around himself*（自分の周りにさなぎとよばれる小さな家を作る）と描写されているのに対し、日本語では「さなぎになる」と簡潔に述べてある。そして *stayed inside for more than two weeks*（2週間以上も中にとどまる）という描写は曖昧に「何日も眠りました」となり、*nibbled a hole in the cocoon, pushed his way out*（少しずつかじってさなぎに穴をあけて、道を作ってそこから出て来る）という青虫が行う事柄が説明的に描写されているのに対し「さなぎのかわをぬいででてくる」と書かれている。このように英語では明確な説明、主体者が行う事柄、として具体的かつ客観的に描写されていることが、日本語訳では曖昧になったり、まるで自然に変化する事柄のように描かれたりしている。

この他にも日本語訳に見られる特徴が、オノマトペの使用である。（オノマトペについては、（3）節で詳述する。）英語の *very hungry, hungry* は「はらぺこ」または「おなかがぺこぺこ」と訳してあり、「はらぺこ」は完全なオノマトペではないかもしれないが「お腹がぺこぺこ」からの変形で半オノマトペと言えよう。「ぺこぺこ」を強調した「ぺこぺこ」は文2. 4. 5. 6. 7. に5回も出て来る。まず絵本のタイトル *The Very Hungry Caterpillar* が「おなかがすいたあおむし」ではなく「はらぺこあおむし」となっているところが実に妙訳といってよいであろう。次にオノマトペが多用されている日本語訳を、*From Head to Toe*『あたまからつまさきまで』の比較で見えていく。

## （2）*From Head to Toe*と『あたまからつまさきまで』の比較

*From Head to Toe*もエリック・カールの作品であり、日本語に訳されているので表2.にあるようにそれぞれの文を比較する。この絵本は、様々な動物が登場し読み手である幼児と一緒に体を動かすことを促

英語の絵本に見られる英語の見方・考え方の一考察

す絵本になっていて、タイトルや一つ一つの文章を比較すると、表現方法を変えたり、説明を付け加えたり削除したりといった変更がなされていないため原本と訳本はほぼ一致した内容であるということも可能かもしれない(古市・西崎, 2009)。ところが、日本語訳には一つ一つの動作がオノマトペを使って表現されており、さらに一人称二人称の呼び名の多様化や、終助詞の使い方が特徴的である。

表2 *From Head to Toe*と『できるかな?あたまからつまさきまで』の全文

<i>From Head to Toe</i>	『できるかな?あたまからつまさきまで』
1. I am a penguin and I turn my head. Can you do it?	1. ぼくは ペンギン あたまを くるんと まわせるよ きみはできる?
2. I can do it!	2. できるよ できるよ くる くる くるるん
3. I am a giraffe and I bend my neck. Can you do it?	3. わたしは きりんです くびを ぐいんとまげられる あなたは できますか?
4. I can do it!	4. できるよ できるよ ぐいーん ぐいーん
5. I am a buffalo and I raise my shoulders. Can you do it?	5. おれは バッファローだ かたを あげさげ できるんだ きみは できるかな?
6. I can do it!	6. できるよ できるよ あげ さげ あげ さげ
7. I am a monkey and I wave my arms. Can you do it?	7. ぼくは さる うでを ゆらゆら ゆすれるぜ あんたできる?
8. I can do it!	8. できるよ できるよ ゆら ゆら ゆら ゆら
9. I am a seal and I clap my hands. Can you do it?	9. わたしは あざらしです りょうてを ぱんぱんならせるよ あなたはできますか?
10. I can do it!	10. できるよ できるよ ぱん ぱん ぱん ぱん
11. I am a gorilla and I thump my chest. Can you do it?	11. おれは ゴリラだ むねを どんと たたけるよ きみは できるかな?
12. I can do it!	12. できるよ できるよ どん どん どどん
13. I am a cat and I arch my back. Can you do it?	13. わたしは ねこなの せなかを ぐうんと まげられる あなたは できるかしら?
14. I can do it!	14. できるよ できるよ ぐうん ぐうん
15. I am a crocodile and I wriggle my hips. Can you do it?	15. おれは わにである おしりを くいくいゆすれるぞ きみは できるかな?
16. I can do it!	16. できるよ できるよ くい くい くい くい
17. I am a camel and I bend my knees. Can you do it?	17. わたくし らくだです ひざを きゅっと まげられます あなたは できますか?
18. I can do it!	18. できるよ できるよ きゅっ きゅきゅ きゅっ
19. I am a donkey and I kick my legs. Can you do it?	19. ぼくは ろばである ぼーんと けつとばせるんだぞ きみは できるかい?
20. I can do it!	20. できるよ できるよ ぼん ぼん ぼーん
21. I am an elephant and I stomp my foot. Can you	21. わたしは ぞうだぞう どしんと あしを ふみな

do it?	らせるぞ あんたはできるかな?
22. I can do it!	22. できるよ できるよ どっしん どしん
23. I am I and I wiggle my toe. Can you do it?	23. わたしは にんげん つまさき もじよもじよ できるんだ きみは できる?
24. I can do it! I can do it!	24. デキル・デキル・デキル! モジヨ・モジヨ・モジヨ!

たとえば、文1の *turn my head*、文3の *bend my neck*、文7の *wave my arms* などの動物の動作が、すべてオノマトペを使って「あたまをぐるんとまわす」「くびをぐいんとまげる」「うでをゆらゆらゆする」などと表現してある。そして原文では動物がすべて、自分は「～する」という平叙文になっているのが、日本語訳では「～できる」で表されており、それぞれの動物に「～できるかな」と問われると、男の子や女の子が「できるよ できる くるくる くるるん」とオノマトペを使って答えている。英語の “Can you do it?” “I can do it.” というやり取りも音の繰り返しがあって楽しめるが、日本語はそれに加えて「できる」を繰り返してからオノマトペを加えることで、さらにリズム感が出てくるようになっている。

また、英語では常に *I* と *you* で表される一人称と二人称が、日本語になると動物によって「わたし」「ぼく」「おれ」「わたくし」、「きみ」「あなた」「あんた」と使い分けられているのも英語では表現できない側面である。日本語の自称詞や他称詞は、地位・立場・性別・年齢などによって、さらに相手や自分の立場や置かれた状況によって使い分けられている。このような使い分けを行うことで絵本に登場する動物の雌雄やキャラクターの表現が工夫されている。

文23の “I am I” の和訳が「わたしは にんげん」となっているところに主体を主張しない日本語への翻訳の工夫がみられる。また文24の “I can do it! I can do it!” は人間の子供が答えるのではなく、オウムが答えているので日本語ではカタカナで表記されているのが、日本語ならではの視覚に訴える表現法である。

### (3) オノマトペを使った表現

オノマトペとは擬音語・擬声語・擬態語をひとくくりにした言葉で、日本語にはこのオノマトペによる表現が枚挙にいとまがないほど多くあり、さらに独自のものを作ることもできる（小野、2009）。一方英語の擬音語や擬態語は、*bang* 「バンという音、<ドアなど>をガタンと閉める」*fluffy* 「ふわふわ」*squash* 「～をぐしゃぐしゃにする」などがあるが、日本語と比較するとかなり少ない。前節で示したように英語の原文と日本語翻訳の文を比較してみても、確かに『はらぺこあおむし』の文2では、*pop! out of the egg* (ぽん! とたまごから) のところに英語も日本語もオノマトペが使っているが、英語の原本では存在しないオノマトペが日本語に訳された場合に多用されている。オノマトペによってリズムカルな要素が加わって、読み手である幼児が楽しめるように効果的に使用されていると言ってよいのではないだろうか。というのは、幼い子どもの中の世界ではこのオノマトペが日常会話や身体表現に多く使用されているからである。幼児語では犬は「わんわん」車は「ブーブー」というようにオノマトペが使われている。オノマトペを使って表現することは、直接的・感覚的・絵画的に把握することである、と荒木(1994)は述べているが、これは上で見てきたように説明的・論理的な描写を好む英語と対照的な表現方法である。

本稿で比較した二つの絵本の他にも、日本語ではオノマトペが使われているのに英文では説明的な記述がなされている例をいくつか挙げておく(表3を参照)。いずれも日本語が原文で英語に訳されたものである。すべてについて言及するのは省くが『とん ことり』は本の題名そのものがオノマトペであり、それが



英文では *Anna's Secret Friend* となっていて非常に具体的である。『はじめてのおつかい』では「ころころがる」が *rolling across the road*、「じんじんいたむ」が *hurt something terrible*、「ぺちやくちやぺちやくちやおしゃべり」が *chit-chatting* などと訳してあってオノマトペは訳が困難ではあるが状況は伝わる。がしかし、「へいにぺたっと」体をつける場面、「くるくるくるくる」探す場面は英文では省略されているし、「めがしばしば」する場面は、*blinked* (まばたきをした) となっている。さらに『ぐりとぐらとすみれちゃん』にでてくる「ごろんと」「ぽーんと」「ぴーんと」などのオノマトペはそれぞれ、*hits the ground and rolls a bit*, *hits the ground and then bounces*, *cracked open* と英語では解説的な描写である。かぼちゃが「ぼくぼく」としているという感覚的な状況は英語では表現されていない。

日本語が容易に英語に翻訳されなくてもどかしく感じる状況は、逆もまたあり得る。たとえば『はらぺこあおむし』がつぎつぎと食べていくところで用いられる英語は *ate through* で、実際に絵本には穴が開いていて、読み手が指を使って食べたものを通り抜けて出てくる青虫を再現できるようになっており、それが幼児にとっては読み進む際の大きな楽しみである。それが日本語ではただ「食べました」になっているので、*ate through* の意味が出てこないのが非常に残念であることは古市・西崎 (2009) も指摘している。オノマトペを使った日本語が英語にうまく翻訳できないだけでなく、英語も日本語に翻訳しづらい箇所が確かにある。

表3 日本語で使用されているオノマトペの例とその英訳例

『とん ことり』	<i>Anna's Secret Friend</i>
そのとき、 <u>とん ことり</u> (p. 5)	Suddenly she heard a quiet tip tap sound.
かなえは、・・・ <u>がちやり</u> と、げんかんのドアをあけました。(p. 26)	Anna ... quickly opened the door.
おんなのこは、 <u>もじもじ</u> して かなえをみつめ、・・・ (p. 28)	The little girl looked at Anna shyly and ...
『はじめてのおつかい』	<i>Miki's First Errand</i>
みいちゃんは、 <u>どきん</u> として、へいに <u>ぺたっと</u> くつきました。(p. 6)	Miki jumped out of his way and ...
ひやくえんだまが <u>ころころ</u> 、ころがっていきます。(p. 10)	The two coins in her hand went rolling across the road.
あしもても、 <u>じんじん</u> いたみます。(p. 10)	Her hand and knees hurt something terrible.
(みいちゃんは) <u>くるくる</u> <u>くるくる</u> 、さがしまわると、(p. 13)	Miki aloud searching here, there and all over.
おみせのおくで、 <u>ごとごと</u> <u>がさがさ</u> おとがして、(p. 18)	The storekeeper came running out, wiping her hands on her apron.
おみせのおばさんと <u>ぺちやくちや</u> <u>ぺちやくちや</u> おしゃべりをして、(p. 21)	After chit-chatting with the storekeeper for some time,
おみせの おばさんのめと みいちゃんのめが、 <u>ばちんと</u> あいました。むねが、 <u>どつきん</u> <u>どつきん</u> なって、めも、 <u>しばしば</u> おとがしました。(p. 22)	The storekeeper and Miki's eyes met head on. Her heart pounded hard and her eyes blinked.

『ぐりとぐらとすみれちゃん』	<i>Guri and Gura's Special Gift</i>
「さあ、ぼくたちも あさごはん、 <u>はらぺこ はらぺこ</u> 」 (p. 3)	"Let's have breakfast now, shall we? I'm starving!"
「うん つくろう。あまい <u>ぼくぼくの かぼちゃ</u> 」 (p. 4)	"Now what do you say we try growing some squashes!"
かぼちゃは <u>ごろんと</u> ころがりました。(p. 18)	The squash hits the ground and rolls a bit.
かぼちゃは いきおいよく <u>ぼーんと</u> はずんで そらに あがり ー おちた ひょうしに <u>びーんと</u> ひびが はいって ー(p. 20)	The squash hits the ground and then bounces one great big bounce high into the sky and ... when it hits the ground again, it finally cracks open ...
「 <u>ぱちぱちぱち</u> 」と はくしゅが おこりました。(p. 25)	At that moment, clapping can be heard from all sides,
かぼちゃの <u>ぺちやぺちや</u> に、 <u>べたべたやき</u> (p. 28)	Squash soufflés and squash flitters

#### 4. 考察

英語絵本の使用は、まとまりのある英語を聞くことによって、英語特有の音やリズム・イントネーションに触れることができたり、話の流れや絵を手掛かりに未習の語彙や表現の意味を推測したり、概要を把握したりする力を育む。また異文化や異なる価値観や世界観に触れる機会となり、異文化への興味・関心が高まる。さらに文字を意識しながら読み聞かせをすることで音読することも可能となるであろうし、メッセージ生の高いものであれば、心の成長も助けるであろう (樋口他、2019)。教材としての取り上げ方によって様々な利用可能であろうが (又野、2014)、子供達の多くが母語の日本語ですでに親しんでいるような絵本を英語で取り上げることで、日本語と英語の絵本を比較することが可能となる。本稿では『はらぺこあおむし』と『できるかな? あたまからつまさきまで』を取り上げて、日本語版と英語版を比較してみると、日本語の絵本では、語り口調や劇的要素といった特徴がみられ、さらに変化する人称代名詞に加えてオノマトペの多用から、感覚的で直接的な表現を用いられるということがわかった。一方英語の絵本では説明的で分析的および客観的表現が特徴として見られた。このような表現方法の違いや特徴は、先に見た川端康成に代表される日本の文学作品にも見られ、日本語と英語の一般的な表現方法の違いと見ても良いのではないだろうか。であるとすれば、子供がよく親しんでいる絵本を英語で読み聞かせをすることによって、子供たちは何らかの違いに気がつき、英語学習の初期段階においても英語独特の表現や日本語独特の表現に触れる機会を提供できると思われる。無論小学生が、全ての英語を理解して日本語と英語の表現方法の違いについて分析的に比較できるわけではないが、少なくとも日英双方の絵本にふれることで、英語による見方・考え方にふれたり日本語によるコミュニケーションと英語によるコミュニケーションの共通点や違いを体験したりすることが可能である。このような体験は、異文化に対する柔軟な姿勢の育成に結びつき、その後のさらなる英語学習への発展へとつながるのではないかと。

本論では比較的長い絵本を取りあげたが短い絵本もある。例えば『きんぎょがにげた』(五味、1982) という日本語が原本の絵本に、以下のような英語の訳本がみられた。左側が原本の日本語で、その右に英訳をつけた。

きんぎょがにげた (五味太郎・作)

きんぎょがにげた。	Where's the fish?
どこに、にげた。	There's the fish.
おや、またにげた。	Where's the fish?
こんどはどこ。	There's the fish.
おやおや またにげた。	Where's the fish?
こんどはどこ。	There's the fish.
ほら またにげた。	Where's the fish?
こんどは どこ。	There's the fish.
こんどは どこ。	There's the fish.
こんどは どこ。	Where's the fish?
いたいた。	There's the fish.
もうにげないよ。	Home at last.

この絵本の日本語では、おや、おやおや、ほら、いたいた、などの劇的要素や語り口調を使った表現になっているのに対して、翻訳された英語では *Where's the fish?* と *There's the fish.* だけが終始繰り返されていくという論理性を前面に出した英訳となっている。このような違いを良いと見るか、これでは英訳が不十分と見るか意見が分かれるところではあろうが、わかりやすい英語なので低学年あるいは中学年にも理解可能と考えられ一例として紹介できる。

新学習指導要領で示された「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」とは「日本語で行うのとは異なる視点で物事を捉え」、「日本語とは異なる考え方で思考していくような物事を捉える視点や考え方」（文部科学省、2017, p. 11）、と解説されているだけで、具体的にはどのような見方や考え方は明確に示されているわけではない。確かに近年の応用言語学分野において、日本語母語話者は英語を習得することによってものの見方・考え方が異なってくるという研究が多数発表されており（村端・村端、2016）、モノの分類や数に対する概念に英語学習が何らかの影響を与えていると思われる。が、ここではそのように厳密な意味での認知的な違いを扱うのではなく、絵本の読み聞かせによって物事の描き方の違いがあることを紹介して、日英の共通点や違いに気づきを促すことが可能となるであろう。

## 5. まとめ

小学校の英語活動及び英語科の授業では、英語の絵本を使うことによって児童に英語の意味を推測させた上で理解へと導いたり、慣れ親しんだ語句を絵本の中で識別したり、オリジナル絵本の創作や英語劇へ発展させるようなプロジェクトを企画したり、というようにさまざまな活動が考えられる。本稿では日本語と英語の絵本を比較することで、学習指導要領外国語活動・外国語の目標にある「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ」外国語による言語活動を通してコミュニケーションを図る資質・能力を育成することを目指すことの一環として、絵本の活用を考えた。

日英の絵本を比較して見ると、日本語の絵本では語り口調や劇的要素といった特徴がみられ、状況によって使い分けられる人称代名詞やオノマトペを多用することから、感覚的で直接的な表現が多く見られ、英語の絵本では説明的で分析的および客観的表現が特徴として見られた。このような表現方法の違いや特徴は、先に見た川端康成に代表される日本の文学作品にも見られ、日本語と英語の一般的な表現方法の違いであ

ると思われる。そうであるとすれば、小学校の英語指導で英語の絵本を用いて、英語の見方や考え方、あるいは日英の表現方法の共通点や違いに触れる機会を設け、表現方法が異なる英語への気づきを促すことができるのではないかと論じた。

\*黒木美佐 宮崎国際大学教育学部令和元年度卒業生

## 参考文献

- 荒木博之 (1994). 『日本語が見えると英語も見える』中央公論社.
- エリック・カール (作) もりひさし (訳) (1976). 『はらぺこあおむし』偕成社.
- エリック・カール (作) くどうなおこ (訳) (1997). 『できるかな? : あたまからつまさきまで』偕成社.
- 小野正弘 (2009). 『オノマトペがあるから日本語は楽しい 擬音語・擬態語の豊かな世界』平凡社.
- 五味太郎 (1982). 『きんぎょがにげた』福音館書店.
- 筒井頼子 (作)・林明子 (絵) (1976). 『はじめてのおつかい』福音館書店.
- 筒井頼子 (作)・林明子 (絵) (1986). 『とん ことり』福音館書店.
- 樋口忠彦・加賀田哲也・泉恵美子・衣笠知子 (編著) (2017). 『新編 小学校英語教育法入門』研究社.
- 古市久子・西崎有多子 (2009). 「絵本の翻訳に何が影響しているか: 日英の絵本を通して」『東邦学誌』38 巻、1号、pp. 27-52.
- 古相正美 (2006). 「エリック・カール『はらぺこあおむし』の翻訳文について」『中村学園大学・中村学園短期大学部研究紀要』第39号、pp. 115-117.
- 正置友子・大阪保育研究所 (編) (2015). 『保育のなかの絵本』かもがわ出版.
- 又野陽子 (2014). 「小中連携を視野に入れた小学校外国語活動における英語の絵本の活用方法—絵本 *The Very Hungry Caterpillar* を教材として—」『中国地区英語教育研究紀要』No. 44, pp. 81-90.
- 村端五郎・村端佳子 (2016). 『第二言語ユーザのことばと心—マルチコンピテンスからの提言—』開拓社.
- 文部科学省 (2018). 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 外国語活動・外国語編』開隆堂出版.
- 文部科学省 (2019). 『幼稚園教育指導要領』[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/you/index.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/you/index.htm) 令和2年11月24日確認
- Carle, E. (1970). *The very hungry caterpillar*. H. Hamilton.
- Carle, E. (1997). *From head to toe*. HaperCollins.
- Howlett, P. & McNamara, R (Trans.) (2002). “*Guri and Gura’s special gift*.” Tokyo: Tuttle Publishing.
- Tsutsui, Y, (Written) & Hayashi, A. (Illus.) (1987). “*Ann’s secret friend*.” UK: Viking Kestrel.
- Gomi, T. (1990). *Where’s the fish?* Macmillan Children’s Books.